

せ た か む い

古平町役場総務課
842-2181 (代案)
平成20年5月1日

年表で読む 古平の歴史

[128]

商 工 業 ⑮

無限責任大典記念

古平信用組合

、 続 く 、

◇昭和初期の不況の波

第一次世界大戦後、日本では戦争中の好景気の反動から一転して不景気に襲われ、関東大震災後の不良債権の処理や、それらによる銀行の休業などから経済の混乱状態が続いた。そして歴史にも残るようなアメリカの株式の大暴落は世界を巻き込み、日本の経済はいつそう深刻なものとなった。

世界的ともいえる金融不安のあら

しは当然古平町にもおよび、古平信用金庫略史には次のように記されている。

昭和二年六月二十日現在、「金融恐慌の直接被害は受けなかったが、さすがに不況の反映が現れ、前期末より貯金総額で十四万二千七百二十円の減少を示した」

同四年六月三十日現在、「金融切迫による資金需要が遅まきながら強まり、当組合でも手持ち有価証券をほとんど現金化して貸付けに備えた」

また、第一区(浜町方面)総代である梅野清太郎の昭和六年一月二十一日の日記には、「信用組合の営業状態暫時悪化、預金は減少貸出固

定、四苦八苦、そこかしこに苦境の〇〇(二字不明)とある。

◇町の発展をすけそう漁に託す

このように中で昭和五年、古平の経済を支えてきた鯀漁は漁獲皆無となり、後志沿岸はかつてない大凶漁に見舞われ、不況はいつそう深刻なものとなった。この頃のことを古平信用金庫四十年史では、

「本道でも、都市の銀行ではかなりの騒動まで起こりましたが、辺境に位置する私どものところには直接的な影響はありませんでした。それに、産業組合組織という別個の系統で恵まれていたせいもあったのでしよう。」

それよりも私どもにとつての大問題は、本町経済を左右する鯀漁が大正の末から凶漁となり始めたことでした。それまで平年二万石から三万石あつた漁獲量が一万石を割り、昭和五年には漁獲皆無という最悪の場面となり、漁民の苦しみはもろろんのこと、町全体の経済も全く暗い影におおわれてしまいました。そこで鯀のみを追わず、少し沖に出ると豊富に得られる鯀漁業に活路

を見え出すべきだ、という論が高まりましたが、このために必要な発動機船を造る肝心の資力は、どの漁家にも全く無いことが残念ながら明らかとなったのです。」

(梅野富蔵理事長の談話から)

◇古平信用組合

拡充五カ年計画

昭和五年八月、鯀漁業の不振を打開しようとして発動機船の建造、利用を手がけることになったため、産業組合法による利用事業を兼ねた無限責任大典記念古平信用利用組合に改組した。

当初は金融事業のみを行う信用組合として出発したのであつたが、地元経済の活発化につながる事業であることから、理事長の強い決意もあり役員会での協議の結果、意見の一致をみたのである。

昭和八年一月二十日の総代会で、十六ページにも及ぶ組合拡充五カ年計画表を提案し、基本事項をほぼ次のようにまとめた。

、 以下次号へ続く 、



ベコもち 余談



金ベコ
(花巻の民芸品)

道新から古平町への「ベコもち」取材に当って、地域のベテラン？による実演から実習まで披露しましたが、そのことについて、先月号で紹介したところ思わぬ反響がありました。

「いつか講習会でもあるんですか」と、仲間に入ってやってみたいとか、「知り合いから作ったのをいただいて懐かしかった」また「わが家の自慢のベコもち」までさまざまでした。

このままでは、折角盛り上がった古里の味も尻切れトンボになつてはと、話題を求めて散策してみました。

「ベコもち」はもともと本州の農村が発祥らしいので、前期で町議を辞められた泥の木の佐藤一郎さん宅を訪ねてみました。

佐藤さんのお話では、この辺り

では昔から上等なオヤツとして、田植え時期の保存食としてもよく作つた。米の粉を叩いて、黒砂糖で甘味をつけたが、部落の神社のお祭りのときなどの行事の食べ物として、楽しみだったし思い出が深い。今も冷蔵庫にいくらか保存している。とのことでした。

ただ、昔のように米を臼で叩くという面倒なことはいらないで、市販の粉を使っているそうです。

戸外の椅子に腰を下して、好天氣でしたので、いろいろと雑談を交わして帰りましたが、仕事のところおじゃまいたしました。

また、「せたかむい」で見ました。私も変った作り方をしています、という浜町大和田さん宅をお訪ねしました。古平俳句会の会員でもあり、俳句の雑誌を読んでおられたようですが、早速、台所

の椅子に座って「ベコもち」談義が始まりました。

「家でもベコ成ちはよく作っているんですよ。冷凍庫に入れて置くと何時でも食べられるので便利です」と、先ずは特製のくさもちをご馳走になりました。ヨモギも早い時期に採取して貯蔵しておき、行事のあるときのあんこもちや、お正月の草餅に利用しているそうです。

ここではベコ成ちの変り種？の実物を見せていただきました。

金太郎飴のように、切り口にきれいな模様が現れるように作られたもちで、「のし(熨斗)もち」と言うそうです。白い生地、お祝いの時の熨斗の模様がもちの切り口にきれいに現れていて、いかにもおめでたい雰囲気がよくあらわれています。初めて見た創作「ベコもち」です。

「はなもち」は大ききから模様まで、まさに作る人の創作でいろいろですが、古里の生活の中にこんなにも深く入り込んでいる「ベコもち」に、改めて認識を新たにしました。

やはり「ベコ成ち」の本命は米

を叩いて粉にし、それを使ったものが味わいもあるようです。しかし、今は一般家庭に臼や杵などはないし、面倒な手間のかかることは嫌われますので、簡単に手に入る「ベコ成ちの粉」を使っていますが、先に「ベコ成ち」を作った人たちの間からも「今度は粉を叩いて作ってみたいねえ」という声もありました。いつか本格的な古里の味に挑戦してみたいものです。



→ベコ成ち作りに大ハシヤギ！

昭和三年 続く

▼八月二日

起床五時、例の通り板戸を開け、水まきをやる。妻はトミと早々に農園へ行く。キミ、ササゲ、キウリなどをもうで来る。今日は命日で和尚さんが来られる。もうで来たキミを出す。熊さん、今日は九〇程だったが、イカの大形になったこと、まるで秋イカのような。雨は一向に降らず、海も穏やかで上天気だ。妻はまた農園へ行く。リンゴ、黄金丸も味がつく。ハル子はお盆のダンゴの粉たたきをする。春から家の仕事で頼んだが、おとなしくよく働く子だ。本町から種田候補が道議選に出ているので、町内での話題も賑やかだ。日中の炎天にくらべて夜になるとずい分涼しく、風が吹くと実に涼しい。静かな夜、これなら明日もまた好天ならん。

▼八月二日

起床五時、お盆も近づき忙しい。熊さんは今朝一〇〇程とった。幸治の幼友達であった田中豊さんが

訪ねて来る。聞けば今東京で勉強中とのこと、一〇年前にはよく家にも遊びに来ていたことを思い出す。いろいろ話して帰って行った。

今日は道議選開票日

当選 田中信夫 種田富太郎

丸山浪弥 出町初太郎

次点 藤田諄一 山田信弥

夜になると、種田派では自動車に旗を立て、万歳万歳を叫びなが

しい。今日も炎天だ。午後五時半、幸治以下子供ら一同と墓参する。墓地も人出でずい分賑やかだ。今夜から沖は休みになった。スルメ値上がりし、五四銭で四〇把売る。

▼八月二四日

起床五時、熊さんは例により農園行き。この頃はカラスがせわしいので困る。お盆中なので家にお

高野名孝作さんの日記から

当時の世相を見る

(135)

ら当選祝いで賑わう。

▼八月二三日

起床五時、例によつて板戸を開けた。コノさんとハル子は、リンゴと花を売りに六時前から新地方面へ行き、一〇時帰って来たが、大勢の売人で売り残りがあつたとのこと。いよいよお盆の一二日になつたので、仏前の支度などで忙

参りに来る人も沢山いる。私も午後から近所の一〇軒余りにお参りする。困支店へ行き、主人に二階にある書画、その他の品物を見せてもらい四時半帰る。お盆中の一日夜から一六日まで、漁師は沖止めすることにした。

▼八月一五日

祝聖会の例会、四時起床して行

く、三人目だった。読経後、五時半帰る。熊さん早くから農園行き。私も水まきをしてから、お盆用の花を探りに農園へ行く。朝露が多く、朝風も秋らしくなってきた。菊、キキョウ、グラジオラス、アジサイなどを手折って来る。八時半頃、ヨへ仏参し、石井さんまで行き、その後、田、吉、平、八、正などに寄り、一〇時頃帰る。今日も炎天、これで先月から三〇日も続き、各地では畑作物が枯死するので、雨乞いをするところもあるという。文治、四郎、悦三らは、困の池の水替えをするのを見に行く。夕方、父が子供らを連れて墓参する。日中の暑さに引きかえちようどよい気候だ。

参詣人の多いことお祭りのようだ。墓参は古平の美点でもある。

▼八月一六日

起床五時、例の通り水まき後、ナス畑へ水をやる。菊、その他の花へも水をやる。今日も炎天甚だしい。田中豊さん今日帰られるとて挨拶に来た。私が七時半、見送りに浜まで出たら出帆した後、だったので、残念なことをした。早速

母さんのところへ行き申し訳をして帰る。お盆の二六日で、ヤブ入りの連中は晴れ着姿で歩いている。来る一九日は観音滝観音参拝日なので、ビラを一〇枚程書く。夜、墓参す。昼の炎天に引きかえ夕方から涼しく、散歩がてらの墓参も心地よい。コーロギの鳴く声も秋らしくなった。

▼八月一七日

起床五時、例の通り戸外に水まきをやる。前に水路が出来たので実に便利だ。子供らが落ちないかと心配もある。今日の炎天も甚だしい。早二三日も照り続きた。新聞によれば各地とも一ヶ月以上も雨がなく、井戸水も枯れ、農作物の被害が甚だしいとのこと。困ったことだ。来岸の曾我さん、午前一一時の古英丸で帰られるので、私はリング一筆目転車につけて見送りする。帰りヨに寄り、話して正午帰る。ハル子が昨日お盆で家へ戻ったが、四時頃帰ってきた。来岸の曾我さんが仏参に来られ、いろいろ話す。妻は子供らと農園行き。夕方墓参す。今夜からイカ漁船が出漁した。

▼八月一八日

起床五時半、朝夕は涼しくなったが、日中はまだなかなか暑い。今日も天気快晴だ。イカ漁船は昨夜出たが以外の薄漁で、五、六パイクらいだったとか。熊さんは昨夜も出たいと言っていたが、行かなくてよかった。今日も炎天が甚だしく、何れも一雨望んでいるがなかなか降らぬ。

▼八月一九日

起床五時、熊さんは農園行き。今日は観音滝参拝記念日だ。私も参拝すべく、午前一〇時半、自転車で出かけた。今日の暑さは今夏一番のきびしさだ。山道の土と草いきで、蒸されるような暑さはこのことだ。一〇時半到着し、先ずは水浴びをする。一一時から観音経を上げ、終つて滝の周囲で涼をとる。さすがにこの辺りは幾分涼しい。滝から一〇丁程下がったところで、祝聖会ではダイ鍋で祝宴が始まる。川ですくったザコに、ネギ、ナスなどを入れた馳走、二時頃下山する。自転車で帰り、夜、墓参す。

▼八月二十日

起床五時、熊さん朝早くから農園へ行き、カラスの番兵役だ。二十日盆で墓参も今日で終わりで、これからは日増しに涼しく、そしてまた寒さがくるのだ。子供らは歌葉の浜へカニ取りや磯釣りに行く。四郎や悦は一日の三分の一以上は外で遊んでいるので、真つ黒になった。身体が丈夫なことは何よりの幸福だ。午前中、妻は新地方面の墓参に行く。一一時頃、港町の姉が墓参に来られ、昼食後、花畑を見ながら農園へ行く。今日も炎天で、この分ではいつ雨が降ることやら、全道どこもこの日照りで困っている。夜はいよいよ墓参も終るので、一同で墓参す。鎌のような形の月が中天に輝き、星は満天にキラキラ、良夜だ。新開町の盆踊りの太鼓の音が聞こえる。

▼八月二日

起床五時半、相変わらず今日も炎天。各地で雨乞いやら山火事など新聞に見ゆ。イカ漁さらに無いので、道具も売れない。本年はゴリもさつぱりとれぬので、せっか

く新調したゴリ網も役にたたぬ。雨の降らぬこと、天氣の良いこと、ナギ続きのことなど何十年ぶりのことだ。困支店の兄さん、過日來小樽に行っていたが、一〇日程前から病気になる、目下、笹尾病院に入院中とのこと。全快を祈る。

▼八月二日

起床六時、この頃は朝眠くて困る。熊さんは五時頃すでに農園へ行き、カラスの番兵だ。この頃黄金丸も実が入り、58号も出てくる。値段は卸し一斤四銭。昨夜の様子では一雨あるうと思っていたが、また炎天になった。午後一時から役場で、造田方法について郡農会谷本技師の講話がある。田地のこしらえについては、丁寧にしらえることが何よりも重要なことである、と言うがなる程だ。私らはこれから造田するので、参考にし心がけねばならぬ。五時帰る。夜、タライ湯を沸かす。戸外に出てみれば月が輝き、この分なら雨は当分降らぬだろう。

▼八月三日

起床五時、戸外に水まきをする。

今日も炎天、何時になったら雨が降ることやら。農家の困るのに引きかえ、氷水、海水浴場などは大当たりとのこと。今朝もイカ漁は不漁、五、六パイぐらいとのこと。

大阪のおじさん、今日小樽へ行かれる由、聞けば岡崎の姉さん不快で、過日來就寝中との由、全快を祈る。新聞によれば、檀野代議士の令嬢二人と令息一人、それに姪一人の四人が千葉県一の宮海岸で避暑中、ボートで舟遊び中のところボートが転覆し、四人とも溺死せりとのこと。金銭に不自由なく避暑に行く身でも、とんだ災難があるものだ。一時に三人の子供を失った親の身になったらどんなだろう。気の毒なことだ。

▼八月二四日

起床五時、待ちこがれた雨、五時頃から降り出したので、黄金の雨と喜んだが、六時頃には晴れてしまう。せつかくの雨も、一ヶ月余りの炎天には焼け石に水で、地面がサツとぬれた程度だ。こんな程度の雨では困る。せめて今日一日降らせなかった。イカ漁も思わしからず、一人七、八パイぐらい

のものだ。夜、招魂祭の宵宮祭で子供らがお参りに行く。自動車も参詣の人で忙しい。

▼八月二五日

相変わらず快晴の天気だ。カ干場の大根などは六分ぐらいいは枯れた。このままではナスも枯れると、前の水路から水を汲んでいる。こんな早ばつは珍しい。ウラのダリヤなども、例年ならまだよい花が沢山咲くのだが、この日照りではよい花が咲かぬ。天の恵みは大切なものだ。松葉ボタンだけは、日照りできれいに咲き乱れている。困の勇さん、このところ不快とのことで、今日午後共栄丸で小樽へ行く。私は浜まで見送り、ついでに岡崎へリンゴ一籠と、14号の一房に三つがきれいになり、しかも一五〇匁かかる珍しいものが出来たので、これも一緒に届けてもらうことにした。品評会にでも出したら珍しいものならん。今日は招魂祭当日、父、吉、四郎、悦らは新地まで遊びに行き、夜はまた神社に行く。星が満天に輝き、これでは何時になったら雨が降ることやら。

▼八月二六日

起床六時、今朝も朝から天気快晴。新聞を見ると、各地とも三〇余年なき早ばつで井戸水は枯れ、水道は断水、山火事発生、朝風呂廃止など、この天気には困っている。この後はどんなことが起こるやら心配だ。月末になったので帳簿調べなどやる。子供らは学校が休みなので、毎日海や川に行き、文治は常雄さんと松岡さんと丸山岬まで行く。今日平のヨシさんが手伝いに来てくれて、妻らと張り物をやるがこの天気でよい。朝日生命保険会社はいよいよ窮状が暴露され、政府より解散命令が出される。私はセ代理店で七、八年前、千円の保険契約をしたが、この分では掛金は欠損になるだろう。実にバカらしい。何のための保険なのか分からぬ。

▼八月二七日

起床六時、この頃は朝夕で二時間日は短くなった。熊さんは農園行き。朝は水まき、庭はき、花に水をやるなど忙しい。相変わらず炎天、何時雨が降るやら、カン

カン天気ばかりが続く。妻はハル子と張り物をやっているが、この天気なのではかどる。今朝のイカ漁、二〇パイぐらいのもの、どうも思わしくない。熊さんは大漁なら出たいと思っているようだが、この漁ではダメだ。幸治は自転車で銀行その他へ用達する。途中、一円ぐらい入ったガマ口を落した、中に名刺が入っていたので、拾った人が届けてくれた。五時頃一四、五日ぶりで農園行き。明日は命日ゆえ花を採ったが、見事に咲いている。子供らは板倉の前でキミをゆで、ナス、ネギ、イモなどでだい鍋をやって喜んでる。皆でこんなことをやるのが楽しみなのだ。六時過ぎ帰る。

▼八月二八日

起床六時、前の通りに水をまきやる。朝日が店の先にキラキラ輝く、きょうもまた天気か。快晴は気も晴々するが、こう天気が四〇日も続くと雨がほしい。イカ漁も今朝は二、三〇ぐらいつか、あんなに沢山いたイカが、どこへ行ってしまったものやら。熊さんは農園を休み集金に行く。午後二時

頃、ヨの姉をはじめ子供ら六人、それにわが家の妻と子供ら七人の一行が農園行き。リンゴやキミの馳走を手配す。何と賑やかなことだろう、子供らはこれが楽しみなのだ。私は留守番だ。六時頃、大一行が帰って来る。スイカも赤くておいしかったとのこと。夕方、花へ水をやったが、炎天なので毎日やっているのに元気がないようだ。沢江の山から十四日の月がこうこうと上がる。夜になれば満天の星が輝き、明日も炎天か。

▼八月二九日

今日もまた炎天だ。毎日毎日の炎熱で實際やり切れぬ。一雨降ったら、草や木も人間もさぞサッパリすることだろうに。天等さんもあんまりだ。各地で雨乞いをして、いるそうだが、サツパリ効能がない。あちこちで井戸水が枯れてきたそうだが、わが家の井戸水も幾分少なくなったようだ。ウラの朝顔も例年は屋根まで蔓が伸びるのに、今年は葉も小さく、この頃は日増しに元気がないようだ。月末で熊さん集金に出かける。私は店番を兼ね、ウラの花畑に肥料をや

る。菊も小さい蕾をつけた。幸治と文治もあと二日で学校が始まるのだ。今日も子供ら一行は農園行き。そしてリンゴ、きみ、アジウリなどを採り、また、だい鍋などをやって遊んでいる。これが楽しみなのだ。夕方、タライ湯を沸かす、入った後はサッパリする。家の中はムシ暑いのと蚊群で、ゆっくり字も書かれぬ。早々に切り上げ、~~困~~前の涼み台に腰かけて休む。日中の暑さも去って、涼風もソヨソヨと気持ちよい。十五夜の満月が中天に輝く、星も輝き明日は晴天ならん。今日の樽新(小樽新聞)に古平紹介号が出る。

▼八月三〇日

夜中に曇り空になったので今日こそ雨かと思っていたが、六時頃になってまたカラリと晴れた。そして昨日よりいつそう暑い。父はこの頃少し気分が良いと言って。ノコと金づちを持ってウラでガツガツやっていた。金づちを持てるようであればよい。幸治らは明日帰るので、衣類、その他の支度をする。一一時頃、子供らはおはちにご飯を入れて農園行きだ。だい

鍋の料理をやるのだとのこと。これが何よりの楽しみらしい。四郎は父と家において遊んでいるが、外に出るので体は真つ黒だ。家の中は二時頃には八六度F(三〇度C)にもなり、帳場においても汗が出るくらいだ。四郎はズボンも脱いで素っ裸、子猫と騒いでいる。子供ら八人、何れも壮健でいるのは何より幸福と感謝せねばならぬ。夜はムシ暑く眠れぬ程、一〇時頃、戸外に腰掛けを出して涼む。朝日生命解散せりとて精算人から通知がある。老後を楽しみにして、せっかく加入した保険金が消えてしまふのは実にバカらしい。六〇円余りあり、七八年も掛けたらう。

▼八月三一日

昨日来の暑さ実にひどかった。子供らは丹前も何もかもはねのけ、ゴロゴロ転がっていた。六時起床、今日は幸治と文治が小樽へ帰るので、支度に忙しい。空は曇つてどうやら雨模様になった。午後には時化になりそうなので、午前七時半の外浜丸で行った。家に戻って来て四〇日余りもいて賑やかだったのが、二人いなくなると寂しく

なるだろう。子供たちも皆で浜まで見送りに行く。七時頃から小雨が降りだして、だんだん本降りになった。この雨を毎日のように待っていたのだ。せめて二十日頃に降ってくれたらよかった。今では作物の枯れたものもあり、慈雨にはならぬ。熊さんは月末の集金に出かける。明日から小学校も始まる。船も自動車も客が多いが、船は八〇銭、自動車は一円七〇銭だから、学生らは船だ。降り出した雨はなかなか止みそうにもない。四郎や悦は、蔵の中にムシロを敷いて、近所の子供らと遊んでいる。夜に入り雨が音をたててますます降る。幸治と文治は、今頃は下宿の方々と古平の話でもしているだろう。雨だったので暑さは凌ぎ易く、蚊群も今夜は静かだ。

▼九月一日

今日は祝聖会例会日、四時二〇分目を覚ます。洗面していると目覚し時計が鳴り出した。四時三〇分に起きるべく目覚ましをかけておいたのだが、その厄介にならずに早起きできた。しかし、今後目覚ましがあれば安心だ。支度して

戸外に出たがまだ町は薄暗く、海は大時化、雨はまだ降り続いている。今日は二十十日の厄日だ。幸治らはこの時化前に行つてよかつた。お寺で三〇分程座禅してから読経が始まる。想起すればあの悲しかった関東大地震は五年前の今日だ。何十億という財産と、何十万の精霊を失い、国家の大損害を受けたのだ。記念日であり、特に懇ろに読経、供養した。和尚の部屋で一時間程話し、談じて七時帰る。暗い空で雨は止まぬ。寒暖計も七二度(二六・五度C)で涼しくなつた。妻は子ども等と農園行き。この雨で植え替えやら肥料をやるなど忙しい。店はイカ漁がなぐヒマだが、本年秋はスケソ縄の漁船が多く出るので、縄、ヤメ等の照会がある。裏に行つて見ると、長らくの早ばつに苦しめられた草木、ダリヤ、菊、その他も元気がよくなつた。海に出て見ると寄り木が沢山あり、拾う人も多い。樽新で古平紹介号が三日間出た。高野常吉氏らの功績を讃えている。

▼九月二日

朝のうちは小雨がシヨボシヨボ

降つていたが、一〇時頃から晴れた。熊さんは例の通り農園行き、この頃のクラスのいたずらには困る。三十一日集金で一日畑へ行かなかつたらキミ百本余り、リンゴ三〇斤程も落とされてたとのこと。少しも油断がならぬ。海もナギ、子供らはまた遊びに行く。ハル子は折角慣れてきて良かったと思つていたので、これからの秋、忙しいので家に帰るとのこと、困るが仕方ない。樽新の積丹半島の紹介、今日は美国が出た。一号から全部記念に保管するつもりだ。昨夜、心配して訪ねて歩いてきた大の娘、物置で休んでいたとのこと。ずいぶん心配させたが先ずは良かった。しかし困つたものだ。一雨後は少しづつ涼しくなつたが、例年よりまだ大分暑く、ハイのせわしいこと、新聞を見るも、字を書くことも出来ないぐらいた。二、三日前からひまひまに手習いをしてるが、どうも秋は冬よりも熱心にやられぬ。日中はハイがせわしく、夜は今度蚊がせわしい。手習いはやはり秋の夜長に、涼風が立つてから静かな書斎で、虫の声でも聞きながらやるに限る。今月中

頃からちようどよいシーズンになるだろう。

▼九月三日

曇り空も全く晴れて残暑がなかなかきびしい。例年なら盆が過ぎて、ひと雨降ればめつくり涼しくなるのに本年は別だ。ハル子が昨日から帰つたので、妻が台所の私宅から「久」のお守りまでなかなかゆるくない。こんな時、共同で炊事出来るような設備があれば、食べることが大分楽になると思うのだが。今日の新聞にもこんなことが或る名士の話として出ている。これからは世の中がますます複雑になつていくから、食事のことも楽になつていくてくれることには私も賛成だ。裏に薪切り人が来たので父が出て行く。父もこの頃は壮健になつた。今日から学校も第二学期が始まり、長い休みにゆるんだ身体を緊張させ、勉強せねばならぬ。文治らの下宿している坂下寮の主人からリンゴの礼状が来た。帰つた生徒達を皆真っ黒になつたのには驚いたとある。文治は毎日毎日海にばかり入つていたから

もつともだ。子供ら皆壮健で何より、幸福を神に感謝せねばならぬ。この頃のハイのうるさいこと、昼寝も読書も出来ない。

▼九月四日

起床七時、ひと雨降つたら涼しくなるだろうと思つていたら、なかなか暑い。例年ならお盆頃から一日増しに涼しくなるものだが本年は特別だ。昨日来たスケソ縄四丸とヤメ二丸、□、大和田、(二字不明)の三軒で持つて行く。九時頃から農園へ行き熊さんと交代する。しばらく見ないうちに草も生えたが、今年のリンゴは玉も大きい。早咲きのグラジオラスの球根を掘り上げ陰干しにする。昼食は板倉の前にムシロを広げて食べたが、草木を眺め、鳥や虫の声を聞きながら、心ままに仕事をしておれば寿命も延びるようだ。トミが茄子を取りに来て、アジウリも持つて帰つた。ちよつと油断してクラスに十四号一〇斤程落とされた。昼食後に弓、鉄砲を持つて畑をひと回りする。六時過ぎ花を手折り帰る。今日はいい運動になった。

★犠牲者の慰霊祭

除幕式の後、正午からその場所において、積丹国道改良工事中に尊い犠牲となられた九名の方の慰霊祭が行われたが、現地での慰霊祭の後、禅源寺において多くの参列者の下慰霊祭が厳肅に執り行われた。

完成の喜びの陰に、不幸にしてお亡くなりになられた九名の方のご冥福をお祈りし、ご遺族に哀悼の意を捧げます。

★積丹国道改良工事

の概要

一、工事期間
着工 昭和三十三年八月

住民の悲願

「陸の孤島」から開放

⑤

積丹国道開通

殉職者氏名 死亡年月

小杉吉太郎	昭和二十五年一月
鶴谷勝三	同 二五年三月
金子武三	同 三〇年一月
東山正孝	同 七月
高橋進	同 同
小枝豊吉	同 同
船水松三郎	同 同
須貝光雄	同 三一年二月
鶴谷オツエ	同 同

竣工 昭和三十三年一〇月

一〇年二か月

二、就労人員

延人員 七一〇、四八七人

三、年度別施工延長

昭和三十三年	四四〇
同 三十四年	九六〇
同 三十五年	七二三
同 三十六年	六六〇
同 三十七年	一一一

四、改良前との比較

区別

改良前

改良後

古平町原標から余市町まで

一六・六九〇キロ

一四・二三三キロ

有効幅員

一般 一・七

五・五七五

随道 一・七

六・〇

橋梁 三・〇

六・〇九五

最急勾配

一五

六

同 二八年

五七〇

同 二九年

一、一三〇

同 三〇年

一、三〇二

同 三一年

二、五三五

同 三二年

五、四三五

同 三三年

四、五九五

計

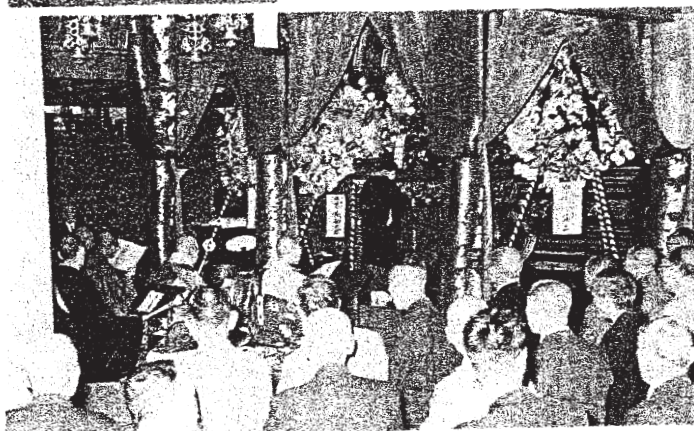
一八、三五〇

※工事内容、使用材料の概要などの資料については省略

← 本堂にしめやかに読経が流れ犠牲者の冥福を祈る



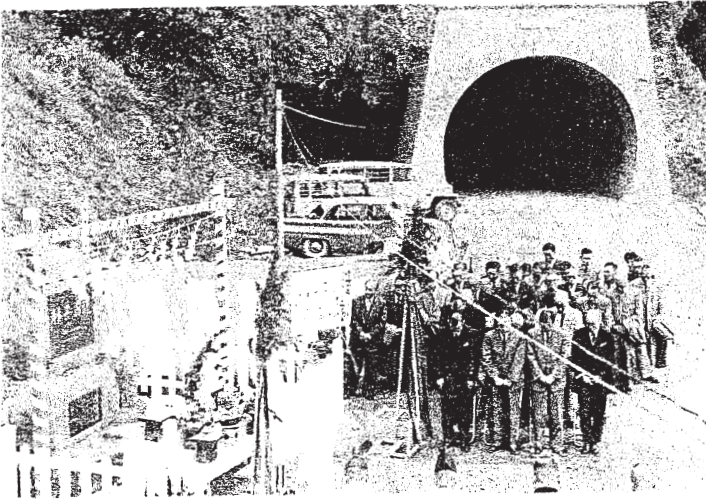
← 禅源寺を斎場として行われた慰霊祭



★国道開通を率直に 喜ぶ町民の声

気軽に何の苦勞もなく
通行 — 漁業者 —

私はこの町(古平町)に六十年住
んでいます、余市山道の出来た



→ チャラツナイ隧道余市側で
行われた竣工式

のは明治四十一年頃だと記憶し
ています。当時は人の通れるだけ
の険しい山道よりなく、これが唯
一の道路だったので有難く利用し
ていましたが、それにしても老人、
女、子供には山越え無理のよう
でした。従つて海上の利用というこ
とになります、時化のときは命
がけで乗船するようなもので
した。それが今度、予
想もしなかつた海岸道路
が出来、年中、何の苦勞
もなく通行できることと、
魚介類の搬出がスピーデ
イになり、鮮度の落ちな
いものが出されるので価
格の面に大きく影響し、
経済生活上に明るい見通
しがもてるようになり、
ただ有難いの一語に尽き
ます。

高校進学に朗報

— 公務員 —

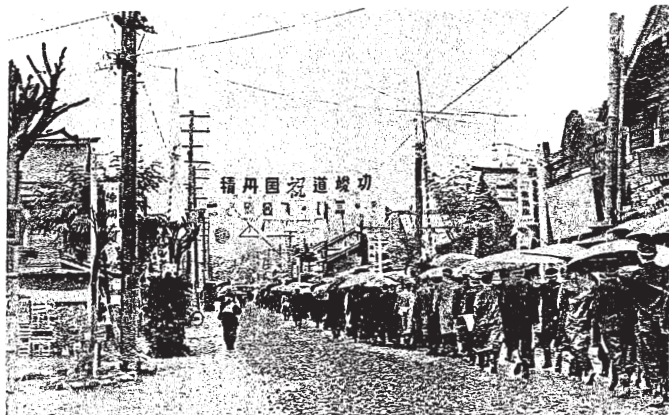
私は薄給の一公務員で
すが、苦しい中から子供
達をそれぞれ上級学校へ
二人入れています、今
までは上級学校への入学

には外へ出なければならず、従つ
てこれに要する出費も多く、町と
しても優秀な人材を眠らせている
事実が多かつたのですが、海岸道
路の開通によつて余市町までスク
ールバスによる通学が出来るよう
になり、文教関係への影響が大き
く評価されます。また冬季出張
などの際は海上によらなければな
らないので、吹雪や荒天になると
何日も船便が止まり、余市あた
りで足止めをくらつて閉口します。
これからは冬季の交通も確保さ
れ、いろいろな角度から町の發展
が期待され喜ばしいことです。

家庭用品も今までより安く

— 主婦 —

私のところは親戚や肉親の者が
札幌・余市方面に沢山おられます
でよく出かけますが、年もとり丈
夫な方ではないので、夏は我慢し
てバスにゆられて行きますが、冬
には船を利用するよりあります、
ん。そうなると船に乗ることが気
がかりになり、いざ乗船となると
気分が悪くなり、時化たときな
どは歯をくいしばつて乗つたもの
です。それが今度、何の苦勞もなく、



← 全町挙げて竣工を祝う、
小・中学生による旗行列

身軽く旅が出来るのかと思うと
気持ちも明るくなります。また
一方では、日用品をはじめ家庭用
品が今までより安く、早く手元
に入ることが明らかです、ので大きな
期待をかけております。

(昭和三十三年十月 開発局・
小樽開発建設部発行『竣工を記
念して』から転載) (続く)

町内の学校探訪 9

古平小学校

◇古平尋常高等小学校と改称

明治三六年九月一四日、浜中尋常高等小学校を古平尋常高等小学校と改称した。

学校制度も次第に整えられ、地域住民の教育に対する意識も年々高まり、就学児童数の増加もあり、明治三四年に一教室を増築したが、児童数の増加に追いつかず教室が不足する状況であった。

そこで同年三月、町会に増築費として二五〇円を計上したが、あいにく本年はニシンが薄漁だったことから否決された。しかし、教室不足の現状はどうにもならず、窮余の策として、隣り合っている古平町役場

を校舎に転用し、役場は元古平病院に移転することになった。

古平病院で使用していた器具や備品などは、学校の教材として利用することにし、役場の古い建物を急遽改造し、尋常科三年生男子八六人を収容する教室とした。

また、古平尋常高等小学校と改称したこと、これまでの沖、群来両分教場を分離し、それぞれ独立して元の小学校とした。

※ 古平町役場が移転した元古平病院の建物は、古平警察官駐在所の向い側、苗代沢建設さんと大谷さんの間にあり、西村建具屋さんが入居していたが転居により、平成一七年解体された。解体業者の話ではか

なり腐朽が進んでいたというが、それにしても古平町の歴史的な建築物でもあり、惜しい結果となつてしまったのは残念なことである。

× × ×

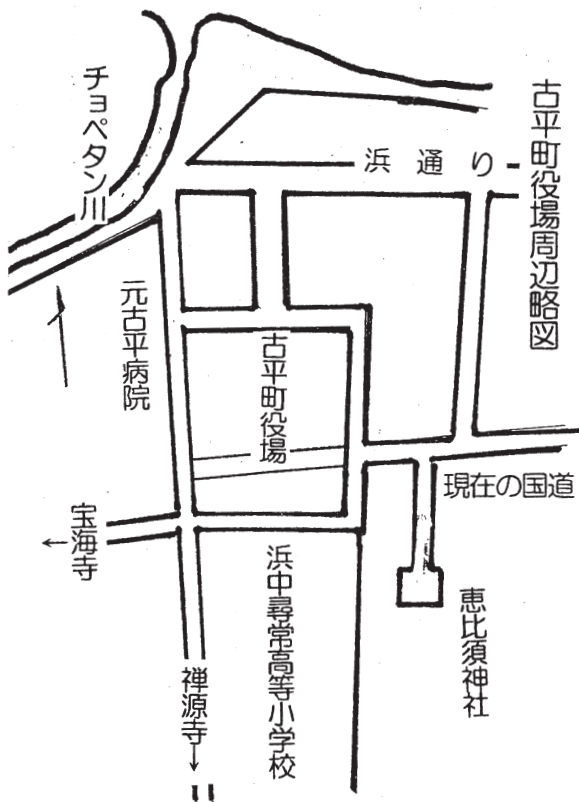
その翌三七年五月から、教科のうち随意科目として農業科を加えた。その教則には第十三条として「農業は、農業に関する普通の知識を得さしめ、農業の趣味を長し、勤勉利用の心を養うを以て要旨となす」とあり、浜町寺の沢に実習地約一町歩(一ヘクタール)を得た。既に畑

地になっているところもあったが、実習は開墾から作業を始めたところもあり、教材園の外、ばれいし、大豆、大根などの作付けをした。

◇記念学校林の造成

明治三七年二月、ロシアとの間に日露戦争が起きたことから町会の承認を得て、戦時記念学校林を造成を始めることになった。

これは戦時下であることから、個人においても無駄をはぶいて各自が生業に励むと共に、町村においても



適切な事業を計画し、町村財産を蓄積して、基礎を強固なものにしなければならぬ、という国の方針にも沿うものでもあった。

造林計画

一、記念林の名称

戦時記念学校林とす

一、記念植樹の種類

一、記念植樹期限

明治二十七年十月より始む

一、經營に要する費用の負担

町財産造成費より金五十円を

支出すること

一、植樹方法

学校児童をして植樹せしむる

一、植樹位置

群来村町有地

土地は、当初は新地町寺の沢付近の未開地の貸付けを受けて植林する予定であつたが、その中に個人貸付け地や既に付与した土地もあることから、群来村の町有地の貸付けを受けた。

植樹は高等科の生徒と教職員によつて行われ、明治三七年から四一年にかけて約三町歩に植林された。植林した本数は一三、一五〇本、当時苗木一本の価格は四厘であつた。

記念林の草刈りなどの管理は、毎

年生徒や教職員によつて行われ、植林後も一千本余りが補植された。

明治四四年五月、山火により落葉

松五〇本ほどを焼失したが、成木になるに従い管理も困難になつてきたことから、大正八年売却された。

その時の本数は二三七本あったと記録されている。

◇學級編成

明治三十七、八年の日露戦争でも町内から戦死者が出て、児童・生徒はその遺骨の出迎えや町で行う葬儀などにも参列した。

その後明治三八年、また学校では教室が不足する状況になり、止むを得ず二部授業を行うことになった。町では工費約四五〇円で急遽三教室を増築、一〇月に落成しこれによつて二部授業は解消した。

この年一月、古平橋が竣工し、これまで渡船によつて往来していた古平川の通行が安全で、便利になつたこともあり、十一月、沢江分教場を廃止し本校に統合した。

◆授業料徴収

八月の町会で、古平尋常高等小学校高等科の生徒から授業料を徴収

することに決定し、九月にその規定を告示した。

その月初めに在学していた生徒はその月分を納付すること。一家で二人以上就学している時は二人目からは半額とする。戦時中でもあり、

出征・召集されている家庭は免除することなどがあり、授業料は一ヶ月三〇銭であつた。

また九月、各学校の教職員の親睦を図るため古平教員組合が結成された。

學級編成					
▽本校					
學級	年	男	女	計	
學級數一三	尋常一年	六六	五五	一二一	
尋常科八	"二年	五五	六二	一一七	
高等科五	"三年	九二	五六	一四八	
	"四年	八八	三三	一二一	
	高等一年	五八	二三	八一	
	"二年	五〇	二一	七一	
	"三年	三六	一五	五一	
	"四年	二四	九	三三	
計		四六九	二七四	七四三	
▽新地分教場					
學級數二	尋常一年	四〇	二八	六八	
	"二年	三八	三一	六九	
計		七八	五九	一三七	
總計					
學級數一五	尋常科	三七九	二六五	六四四	
	高等科	一六八	六八	二三六	

心に残るもの

大 澤 文 子

なんとなく紙面にペンを走らせていた真夜中、この頃になると日めくりを換えるのも早い。

初夏・盛夏・北ぐにの主婦達は忙しい。

裏庭に生う未だ細い蒔なれど、朝々の菜にと刈とり煮て皮をむく。また小庭の隅に群れ生う三つ葉を味噌汁の実にと、片手に余る程刈り取る。

そんな時、ふと思ひ出すのはよく運勢をみてくれた歌友のこと。「交通事故故にはくれぐれも気をつけてよ!」と、いつも言葉をかけてくれたものだった。心から感謝し氣をつけるようにはしているのだが、年齢の重なるたびに思わぬ落とし穴にはまることもしばしばのこと。

仕方のないこととは思ふ日々ではあるが、今朝も鏡にうつるわが身に向かい「大丈夫よね」と声をか

け笑顔を見せる…と、身体中に電波のようなあついものが流れ、小庭をひと廻りしようと氣負う。そこに伸びたつ花群はそれぞれの香を放ちわれを迎えてくれるのだ。「いいア」そんな時、私の心の片隅にすつきりしない消すことの出来ない「なぜ?」のひと文字がある。そうそうあの頃、西部の都市の市民会館にて、『北海道婦人民生委員会』が開催されたことがあった。たしかその頃は金子藤一氏が「古平町民生委員総務」をしておられた頃だったと思う。その時、副総務だった私に「是非出席するように」と指示を受けた。一瞬! 古平町から遠いあの都市まで独りで、一抹の不安は感じたが、持ち前の氣性がそく、「まあいいか!」仕事上のことなれば、と氣負ひ、数日後、夫に見送られ、ひとり旅に出かけ

たものだった。

列車の中では短歌などを詠み、平静を装ひ不安な気持ちを消す努力をしていた。

やがて初めての都市の玄関に降り立つ。不安な気持ちを抱えているわが足元をやさしく吹きすさぶる街の風、地図を片手に会館の位置をたしかめ、タクシーに乗る。運転手さんに色々街中のことをききながら市民会館の会場へ到着。

入口には『全道婦人民生委員会』の大きな垂れ幕が風に揺れていた。各地から代表の女性達、自信満々の面もちでわれ先にと会場の入口を通りすぎてゆく。「まあ私も代表よ!」とひとり氣負ひ入口を通った。受け付けで書類を受けとり、すばやくあいている席に腰を下す。へやがて開会式、支長、議長その他おえらい方々の挨拶、ふと手渡された日程表を繰ってみた…と、なに? 「えつ?」司会者の名前の中に『第二分科会司会者大澤文子』四角い文字が鮮明に踊っているではないか。「えつ何故? 連絡もなしにこの大きな道大会なのに!」

せめてひと連絡があつても…。

おえらい方々の挨拶なんかきく耳もたず、あと数分で各分科会会場へ移動…そして司会…一応おえらい方々の挨拶も終了。女性達もがやがや席を立ちはじめ、五つの分科会場へとそれぞれ移ってゆく。私も第二会場へ急ぐ。ふと第二会場の司会者のテーブルに一輪の小菊が…、うーん目にとまった一瞬!

「やりとげなければ!」ともち前の氣性が動いた! 度胸がすわり、それぞれ席についた女性達にぐろろと目をむけた! 自信満々のようなひとりを書記に指名! 議題に入る、さすが道の代表者だけありどんだん発言! ウーン助かつたなア! 一時間半後終了。各司会者の発表があり、すべて終了。

各代表の女性達と「またね!」と親しく挨拶を交わし列車の人…とになった。

|| あれから数十年経つた現在でも私は思う。

「なぜ?」全道的の会合の場合には事前に司会者に連絡してほしい…と ||

ある「歌」にまつわる話

葛 西 庸 三

太平洋戦争の末期に、古平の街にも米軍機が来襲して死傷者が出た、ということを知ったのは一九四五年（平成七年）七月に北海道新聞社から発行された——菊池慶一著「北海道空襲——一九四五年七月十四日・十五日の記録」——によつてであつた。

その中に、村井芳男先生方から取材した「鉱石積み込みの汽船に」と題する一文がある。

稲倉石マンガン鉱山の鉱石を「射水丸」（約八百トン）に積み込みの作業中に艇（はしけ）が銃撃されて従業員十五人と、稲倉石鉱山関係者五人が死亡し、更に「射水丸」の機関部に爆弾が一発命中して沈没し、昭和二十八年と三十年に沈没した船を解体処理したとき、二人の遺骨を引き揚げて禅源寺の無縁塔に埋葬したことなどが、

詳しく書かれている。

私が古平町に在職中は、あの戦争によつてそうした尊い犠牲者が出ていたことを知らなかった。全く迂闊なことだったと、今更ながら自分の勉強不足を反省している。さて、そうした戦争の歴史を考えてみると、私が生まれた一九三〇年（昭和五年）の翌年に満州事変が勃発し、小学校に入学した一九三七年（昭和十二年）には日中戦争、そして一九四一年（昭和十六年）十二月八日には、当時「大東亜戦争」といった「太平洋戦争」が始まっている。

敗戦は一九四五年（昭和二十年）八月十五日だから、私が生まれてから十五年間の歴史は、日本が戦争の泥沼に入り、最後は敗戦を迎えるという凄まじいものであつた。そんな中で、太平洋戦争が始ま

る年の秋、私は幌別郡鷺別小学校から旧狩太村立狩太小学校に転校した。三度の転校で五年生であつた。

学校の裏に羊蹄山がどがつと居座っていてびっくりした。長身でちよび髭の丁校長は、全校朝会の時「君達はあの立派で大きな羊蹄山のような人間になれ」と訓示したが、小学五年の私には、羊蹄山のような人間とはどんな人間なのか、想像がつかなかった。

私のクラスの担任は年輩で小柄しかも体の細いH先生であつた。仲間みんなH先生のことを「じいさん」と渾名で呼んでいた。

その「じいさん先生」は、十二月八日の未明、日本海軍がアメリカ海軍の根拠地の真珠湾を奇襲攻撃し戦果を挙げたことを、外の勉強をほっぽりばなしにして、そればかり毎日自慢し、そして、天皇陛下のために尽くすことの必然性を熱っぽくまくしたてた。

更に、毎日何回も一つの歌を歌わせた。

あれから六十六年も経っているのだが、その時の歌は今でも頭の中にしっかりと根づき、いつい

なる時でも、スラスラと歌えるのである。何番まであつたのかは定かではないが、更に「題」は解らないが、次のような歌詞である。

一、師走八日の朝まだき

ぼくは 特別攻撃隊

男子の本懐 今日の日を

待っていました お母さん

二、天皇陛下万歳と

遙か 叫んで海の底

聞いてください お母さん

遠いハワイの 真珠湾

こんな歌を毎日毎日歌わさせられたのだから、軍国少年になるのは、当たりまえのことであつた。

しかし不思議なことに、後年になつて仲間にこの歌を知っているか、と聞いても、誰も知らない、と言う。妻にも聞いてみたが、そんな歌は聞いたこともない、とすげなく言う。

一体、この歌は誰が作詩・作曲したものなのだろうか。あの「じいさん」のH先生がご自分で作られたものなのか。

いつも不思議に思いながら、時々口ずさんでは軍国少年に戻るのである。

短歌

古平岬短歌会

「雪」を舞う武原さんの芸道に心切れずに美を保ちたり

金子 寿子

爽やかなせせらぎの音聴えて近くの川面にゆらぐ水芭蕉

坂本 信子

脳検査に連れて来られし病院に名前居どころ又も聞かるる

鈴木 時子

それなりに自分の想ひ残したく一字一字を短歌に託す

田中 香苗

歩む野のみどりは深く並び立つ白樺の樹に色を映して

玉谷 美都子

茜さす雲その俣に空映す積丹の海の春の夕暮れ

丹後 初江

卯の月に名残り雪降る北見の宿荷おろし息子は單身赴任す

寺田 カツ子

春あらし静むを待つて立つ飛行機時の間揺らぎ黒雲抜くる

仲谷 喜美能

雨の降る予報に体はげまして豌豆を蒔き小松菜を蒔く

東 美知

朝夕にさ庭の中に雀らの啄む見れば心なごみぬ

堀 典子

杵つきのよもぎもちふたついただきて好みし亡夫に語りて供ふ

池田 テル

俳句

古平俳句会

沼明り広げ帰雁の幽かなる 越野清治

積丹の岳より風す涅槃西風 斉藤波留

日和よし老いも竿持もて若菜採る 山口悦子

はるか市日影の干蛸春の雪 越野敏雄

浮玉のひよんところで温もれり 大和田絵伊

木の芽風旅の誘ひの長電話 高橋重子

北の地の空真つ青や年明ける 外山俊久

歩みゆく原野の雲雀身に入れて 堀 典子

ものの芽の膨らむ音は今の色 本間寿昭

強東風の積丹の海駈け抜ける 渡辺嘉之

春の雪避けて賢き女かな 室谷弘子

川沿に朝日を浴びる猫柳 仲谷比呂古



雜詠 [五月号]
主宰 水見壽男

冬霞波の尖りは隠せざる

越野清治

露天湯に漁火遠く月冴ゆる
びりびりと指先尖る寒気かな

風強し燈台の灯の冴ゆるかな
知る人ぞ知る寒風の磯釣場

初暦めくるや一句虚子が筆

山口悦子

上の句を詠んで下の句歌がるた
雪眼鏡伊達にあらずも伊達に見ゆ

塗箸に煮こりつるりつるり
初諷経しばし仏を偲びをり

越野敏雄

寒行の太鼓の音の弛みみなく
風花の見上ぐる程に光りをり

ゆつくりと法語と歩み去年今年
書院床ただ一輪の冬薔薇

高橋重子

冬ざれや星のきらめく夜となりし
迷い箸ふれ合ふことも鮎鱈鍋

岩肌に砕ける波濤島の春

外山俊久

堀典子

本間寿昭

渡辺嘉之

室谷弘子

新玉の年や羽ばたく子等祈る

酒を酌み俳句を一句事始

藁帽子深くかむりて寒牡丹

凍てつきて茜に染まる雪の峰

極寒の松にけもの爪の跡

寒牡丹色を眩めて蓑内に

地吹雪の北海道を一呑みす

木の影の縞なしてゐる雪の原

遠き日の思ひの中へ馬櫓かな

去年に酔ひ今年の神酒に更に酔ひ

去年の酒明けて禁酒の今年かな

高波の音に夜明けの小正月

初糶や一番船の大鯰

雪雲の裏に太陽潜みをり

初空の岬より開けて海展け

湾に沿ふ街の灯遠く月冴ゆる

青空と雲のすき間の風冴ゆる

一湾の空青々と年明くる

新玉の春を奏でる波の音

日の光ぐつと引き込み寒ゆるむ

大寒の波を捌きて出船かな



怒涛

【三四】
— 五月号 —

溪谷をたぎり落ちゐる春の水

越野清治

楸松を根こそぎ浚ふ春の水

句を学び生きる楽しみ春灯

斉藤波留

砂はかせ蛭ふちふち小言いふ

ブロックの枯れしと見せて蔦芽吹く

山口悦子

ピクニック弁当までも陽炎いし

揚げひばり輝く空に怡怡として

越野敏雄

雛飾るたたみ六畳凜々と

潮引いて磯菜を見むと人溢れ

大和田絵伊

春寒しとも集ふ日の樂しかり

山笑ふ色さまざまに絵の具皿

高橋重子

川向ひ人声のする臚かな

ものの芽や雲の明るさ沼面にも

ものの芽の萌え出でんとす今日の土手

踏青や光のなかを涉りゆく

夕霞青き木立を包みたり

西空に孤雁別れの声響く

春風を連れて立ち寄る道の駅

天空や十勝の峰の忘れ雲

枝越しの雲は重たし雪軽し

雛の客早やばや来る漁ばやし

内裏雛忽と一門貌なせり

裾野原三月の風吹き荒ぶ

夫の手を借りて七段雛飾る

外山俊久

堀典子

本間寿昭

渡辺嘉之

室谷弘子

仲谷比呂古

春爛漫

瀧内 優子

桜梅紫木蓮にと競い咲く今年の庭の賑々しきかな

紅梅のひと木ありて池の辺にいちはやく咲く五、六輪

昨日より強き春風に連翹の蝶舞ふごとく黄の花の散る

春疾風過ぐる二、三日池の面に散る花びらは絨毯の如とし

賜まはれしアマリリスの球根は貴婦人のごと咲き誇れる

紫木蓮の花の色鮮やけし冷えゆく日の本草に降りたる

樹のまへに胸はだけるな松の木き男ぞといへりわが祖母は

花の芽の光るを見つつ春の日は独りの心もゆたけきものを

ものみなに風やはらかく渡りきてうるほひ見ゆる春の夕映

唯しづかに生きたかりしよ春の雲松の梢を過ぎてゆきたり

◆◆編集集雑誌◆◆

▽「せたかむい」の発行が大幅遅れてしまいましたが、先月は3・4月合併号として、四ページ増やし二〇ページとして発行いたしました。「幼稚園の閉園」「古平のベゴもち取材」など地域の新しい話題をご紹介しますが、これからも努めて取り上げてみたいと考えております。

今までは月末に翌月号を発行しておりましたが、前年度からは発行日が不定期になってしまい、ご覧になっておられる方々のご要望に沿えなかつたことをお詫びいたします。

また、時によつて印刷や、紙折りの不揃いなど見苦しいものがありますが、これらに付きましてはご了承下さい。特に紙折機の場合は写真版が多かったり、印刷のインクがよく乾いていなかったりすると、正確に紙が折れないですれまます。湿気の多い時、雨の降っているような日はどうも調子がよくないようです。

もう何十年も前になりますが、ある印刷屋さんに行ったところ、印刷機のある室の中に紙をいっぱい広げていました。紙は湿気で伸縮するので、色を重ねて印刷する時などはこうして乾かすそうです。今はどうやってい

るんでしよう。どんな仕事にも些細な苦労があるようです。

▽これは管内の各町村が持ち回りで開催しているようですが、六月六日、古平町を会場に後志管内商工会婦人部研修会が開かれます。せっかく古平町へお出でですので、記念として『古平町のにしん漁』についてのアルバムを編集し、それを古平商工会で印刷いたしました。今まで、古平町の歴史に関係あるアルバムを既に一一集発行し、その内、にしん漁について第一・二集を発行しておりますので、それに新しく資料を加え、一冊にまとめてみました。町内の皆さん方には、文化祭に合わせて、町で再度印刷いたしますので後ほどご覧ください。

▽初夏からいよいよ夏到来ですが、風光明媚を誇る海の景色がだんだんせばまってきたようです。海岸道路はトンネルで覆われ、交通も地下鉄並みになってしまいました。丸山岬海岸は落石の危険から交通禁止。また、高台から風景を楽しめる群来町の旧自動車道は、心無い人による家庭からの一般ゴミや、家庭用電気製品などの捨て場になってしまつて現在はこちらも通行禁止です。現在護岸されていない自然のままの海岸線は、丸山岬だけとなってしまいました。

古平町史年表

昭和36年 (1961) ~続き

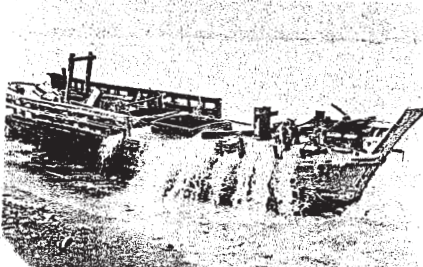
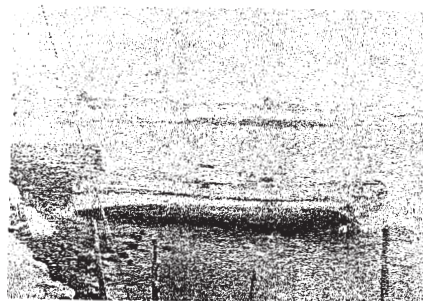
- 8/30: NHKラジオで『古平町のソーラン節発祥について』が放送される
- 9/29: 小樽医師会による無医村巡回診療が行われる
- 12/4: 丸山隧道工事中落盤により大野一郎 (当時54歳) が死亡する
- 12/29: 上水道に対する町民からの要望が高く、実施に向けて水道調査特別委員会が開かれる
- 12/31: 沖町への国道で雪崩により沖町小野長太郎 (当時51歳) が死亡する

昭和37年 (1962)

- 1/20: 大時化で防波堤の一部が決壊し、鉱石運搬用の大斛 (はしけ) が港町海岸に流され座礁し大破する
- 1/27: 古平漁港経済効果調査のため、北大酒井教授一行が来町する
- 1/-: 古平信用金庫本店店舗が新築し、落成式が行われる
- 2/10: 古平河口付近にトドが現れ大勢が見物にきたが、トドは捕獲され解体処分される
- 2/3: 古平中学校第2期校舎建設工事の竣工式が行われ (第一期工事に引き続いて余市町赤石組が工事を請負う)
- 2/20: 古平漁港開発事業効果調査がまとまり発表される
- 2/24: 丸山岬沖で発動機船が座礁し沈没したが、乗組員は全員救助される
- 3/8: 小樽土木現業所から、係員が入船町海岸保全区域調査に来町する
- 3/-: 浜町の伝染病隔離病舎を解体する



↑ 通称・沖村街道、海に迫った崖からの落雪で埋った道路



↑ 大時化で流され海岸に打ち寄せられた漁船



↑ 古平中学校第二期工事竣工